

# 豆まき・ます・鬼・伝統行事

高橋 陽子

家庭から「おにはそとくふくはうちく」という家族揃っての大きなかけ声は聞かれなくなった、と昨

今言われている。しかし、買ひ物に行けば、店頭には豆や鬼の面、ひいらぎの飾り物を目にし、子どもたちにはそれぞれの家庭の方法で「節分」は引き継がれていると思われる。

幼稚園として、日本の伝統行事である「豆まき」を子どもたちとどのように取り組むかは、特に一番

大きい組の担任である時にはいつも考えさせられる。

それまで私が担任した年長組では、「豆を入れる」「ます」を全園児分紙で折り、三、四歳児には買いに来てもらうという形で渡していた。年長組は二クラスあるが、たいてい二クラス前の廊下に店を出し、やりたい人が作るようにしていた。

「もうすぐ豆まきの日だから、ますを作って、小さ

い組さんにあげよう」と数人に声をかけて廊下にお店を出す。最初から見本用に数種類のますを作っておいたり、その場で作って見せたりして、子どもが作ってみたい形を選んで折る。自分のますくらいは自分で作ってもらいたいと願い声をかけるが、苦手意識のある子どもや他のことに夢中な子どもは「これなら簡単だから作ってみようよ」と言ってみても、「あとで」という返事が続き、二月三日になつてしまうことはよくあつた。

数日間は取るが「あとで」と言う子どもや自分のだけ作っておしまい、という子どもが多いと、子どもによつては一人で八個も九個も作ることになる。器用で折り紙が好きなお子でもいれば、「できる、できる」とできばえよりも数をどんどんこなしていく子どももいる。

きちんと折られていないためにゆがんでいて、すぐに崩れてしまうものや、豆を取ろうと指を入れたらすぐに壊れてしまいそうなものもお店には並んで

いる。年少組の子どもたちが宣伝を聞いて担任と一緒に、または友だち同士で次々に買いに来てくれる。お客さんでいっぱいになると、「早くしなくては」と焦り（本人たちは本当にはりきつているのであるが）ますます形の整えられないままに渡されていく。

本来折り紙は、折り、また折るといふ積み重ねで、たいていのものは表現でき、絶妙な折り重なりによつて多少のことでは元に戻らないという、一枚の紙から創り出される不可思議な力がある。が、焦る子どもたちは数をこなすことが課せられ、どうにも一折り一折りをていねいにとはいかない。私の「角をしっかりと合わせてね」「折り目をきちんとつけて」と言う声も、こういう状況にしたのは私とわかつていただけに、子どもたちの耳には届いていない。買って頂いたますが壊れないようにと、セロハンテープの力を借りることもしばしばであった。

さて、豆まき当日。降園前に自分の作ったますを

持ち園庭に出る。そこで、自分のまですらないことに気づいた子どもには、ある程度確保しておいたまですを渡すことになる。

中には、鬼の面をつけている子どももいる。鬼の面は、画用紙に顔を描き、切り抜いて毛糸でもじゅもじゅの毛をつけ、黒帯で留める簡単なものである。

そうして、教師から豆をもらい、園庭の隅々まで大きな声で「おにはそと〜ふくはうち〜」と言いながら走り回り豆をまくのである。

おなかの底から声を出し、威勢よく豆まきをすること、自分のからだをいつも以上に使うことになり、からだを丈夫にすることにつながるという持論を持って豆をまいている。とともに、家庭では大きな声を出すことは内をさらけ出すことになり、避けるようになっていく。近所との関係の難しさもあるのだろう。そんな時代であるからこそ幼稚園の中で、なかまとともに思いきり声を出しながら、なか



まとともに自分たちの生活する場を守る、この体験はいつまでも伝えていきたいと思っていることである。

さて、昨年のこと。私は何度目かの年長組担任であった。幼稚園で節分の日のもち方について話し合った際に、毎年続いてきていた全園児分のまですを年長児が作ることはやめる、年長児は自分のまですを自分で作るということになった。この年、年長のそのころの活動として違う大きな流れがあり、まず作りかける時間を取ることとは不自然だったことが一番の理由であった。

私の幼稚園では、年長児全員が同じものを作る活動はいくつかある。新入園児へのプレゼント、うちわ、はごいた、こま、卒業アルバムの表紙絵作り、

などである。これらはたいいてい、ある程度の期間を設け、自分なりの工夫を凝らして仕上げていくものである。

今回のます作りは、時間が取れないということ、みんな一緒に、担任が大きな紙で見本を折り、見ながら子どもが自分の紙を折る、ということにした。長方形から折り進め、開いてつぶす作業や一枚めくりひっくり返してまた一枚めくり、両側を真ん中に合わせて折る、といった作業も入る箱である。

難しいだろうと思った箇所は、机を同じにした友だち同士でフォロワーしあって折っていたのか、あつという間にクリアされて、皆同じ箱ができあがった。自分で作ったには変わらない、とても大事に嬉しそうに扱っていたことが印象的だった。

まずは、豆が入り、手をつかんでまく作業に耐えるものであれば形は問わず、子どものイメージやアイデアを形にしたものでもよかった、という声も聞こえてきたので、今回は是非挑戦したいと思って

いる。

さて、「豆まきでもう一つ迷うことは、鬼の存在であった。鬼のお面をかぶり、「豆まきする姿に矛盾を感じながら数回の節分の日を過ごしてきた。

幼稚園で初めて節分の日を迎える三、四歳児にとつても、何か目に見える形で豆まきができないだろうか、と考えていた。豆まきといえば、鬼、であるので、鬼をどのように表現したらいいのだろうかと思っていた時に、小学校の教室に並んだ等身大の人型を思い出した。確か、「大きくなる子」という単元で、今の自分の大きさをボール紙に取り、切り抜き、赤ちゃんの時から成長を感じるという主旨で作られたものだったと思う。全紙のボール紙に子どもが寝そべりその形をとり、その大きさの鬼を作って子どもが持つて園庭に出現すれば、豆を思いきりまく対象ができ豆まきという行事がどの子どもにとつてもわかりやすくなるのではないかと思っただけである。

翠朝、さて誰に声をかけて作り始めようかと考えていた。たいてい年長組二月にもなると、朝登園する時には、誰と何をして遊ぶか決まっている。誰と、何をして、が決まりすぎていて、友だち関係や遊びが広がらないこともあり悩みの種となっている。この学年はどろけいやドッジボールやこま回し競争など、大勢でする活動が盛り上がることはあるが、一部の人たちはなかなか入ってこなかった。また、これらのようからだを使って遊ぶ遊びが好きなお子どもたちはそのようなことで遊びや関わりが深まったりするが、じっくり作り物をする、作ったものを活かして遊ぶ体験の少ない人の中にはいた。

その朝、外遊び派であまり作り物をしないタイプのア兒、B兒に声をかけた。「節分の日の鬼を作りたいと思っているの。一緒にやらない？」と言うと「なんでおれたちに言うんだよ」と言い返してきた。理由は言わずに「これの上になちよっと寝っ転

がってみて」と大きなボール紙を床に置くと「こう？」とB兒が寝そべる。そこでA兒に「Bくんの周りをえんびつでなぞってみて」とえんびつを渡すと「難しいな」と言いながらもB兒の形ができあがる。「今度はおれのを描いてみて」とA兒自ら横になる。他の子どもたちも興味津々集まってきて見ている。

切る、色決め、色塗り、顔描きなどを、A兒、B兒や集まってきた子どもたちと相談しながら進めた。年長組の保育室は、中央に何も置かないようにし、広い空間を確保してある。この空間があると数人で丸くなって相談したり、一人でも大勢でも大きな作品を作りあげたり、こま回しのようにからだの一部を勢いよく使って競争したりすることが、自然と行われるのである。また、見通しもよいので、普段あまり接していない友だちの遊びに触れ、興味を持つとひよいとその輪の中に入れる空間の威力がある。

鬼が完成した。あとはある程度重みはあるがきち

んと持っていなければ威厳は保たれないこの鬼を、  
どのように持ち走り回るか、であった。

子どもに持っていてもらい、腰と首の高さに太ゴムを結べるようにつける。怖さを出すためにガッツポーズにした手のこぶしに取っ手をつけて持てるようにする。

いつものように降園前、各自が作ります。持ち、園庭に出る。もちろん、自分が鬼になって逃げるぞ、と決めていた数人が鬼を持って園庭に出てきた。

いよいよ鬼が逃げる。が、何ともやりづらそうである。からだの前につけているために、鬼を見せながら逃げると、横歩きか後ろに進む状態になってしまい、思いきり力が出せないのである。足に当たって、走りづらそうである。私の中には、今ひとつ迫力に欠けた、と少々がっくりくるところもあったのであるが、三人目に鬼をかってでたC子は、「先生、背中につけてちょうだい」と言ったのである。背中

につけても、取っ手の空間に手を入れて取っ手をにぎればよいし、背中にしよう状態で逃げるので全速力でしかも鬼を見せながら走り回れる。子どもの柔らかな発想の転換に、救われた思いであった。

日本の伝統的行事はいくつくらいあるのだろうか。子どもの日、七夕、お月見、大そうじ、正月、節分、ひなまつり。作ることで引き継ぐもの、祝ってもらうもの、からだを使って参加するもの、完成されたものを見て味わうもの、伝統的行事との触れ方はそれぞれである。その時の子どもの様子や活動の流れを踏まえた上で、その行事への取り組みをその都度検討したい。そして行事を通してからだで感じたこと、動いたり作ったり歌ったりといった表現をしたということや、幼稚園でした行事だから、なかまと一緒にだったから、ということ、子どもたちの中にその行事はより意味を持つものになりうるのだと考える。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)